

親鸞「四つの謎」を解く

——高齢者文学人生論

梅原猛 (1925-)

『親鸞「四つの謎」を解く』(2014) 「新潮社」

『地獄の思想』(1967) 「中公新書」

『人類哲学序説』(2013) 「岩波新書」

『老耄と哲学』(2015) 「文藝春秋社」

それゆえ、年とともに私は神仏の加護を信じるようになった

人間は作家であろうと誰であろうと、九十歳を過ぎると、頭がぼける。次の新しい作品などはまず期待できないが、もしかして例外的に期待できそうなのは梅原猛である。『親鸞「四つの謎」を解く』と『人類哲学序説』を読んでそう思った。

梅原猛も耄碌してはいるが、死ぬ前に人類哲学の本論を執筆する予定だという。遠くない未来に私自身の死が予想されるだけでなく、人類の絶滅の兆候さえ考えられる今、藁をもつかむような気持で梅原猛の人類哲学に期待したい。

『親鸞「四つの謎」を解く』は親鸞の思想と生涯に関する通説への疑問を抱き、独自の仮説を立てて、謎の解明を試みた書だ。親鸞「四つの謎」とされているのは、次の通り。

- 一、出家の謎（親鸞はなぜ出家したのか）
- 二、親鸞が法然門下に入門した謎（なぜ比叡山の修業を止めて、法然に入門したのか）
- 三、結婚の謎について（法然は結婚せずに一生を貫いたのに、なぜ親鸞は妻帯したのか）
- 四、親鸞の悪の自覚について（悪の自覚の深さは親鸞の人生とどのように関係するのか）

このうち一から三までの謎は、親鸞という歴史的人物に関心がない読者にはどうでもよいことだ



親鸞「四つの謎」を解く

——— 高齢者文学人生論

が、四番目の悪の自覚だけは現代人の切実な問題として考えさせられる。地球資源を食いつぶし、環境を悪化させている人類のうちの高齢者は特に存在そのものが悪だ。『歎異抄』の「善人なほもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや」という悪人救済説に親鸞はどのようにして到達したのか。

梅原猛は親鸞の『教行信証』を繰り返し読み、『観無量寿経』に記されている阿闍世王に注目した。父殺し母殺しの罪を犯した阿闍世王である。釈迦は、阿闍世の悪行は、必ずしも自らの意思によるものではなく、父王の因果だと説明し、改めて自己の罪を懺悔する阿闍世を慰めたという。

そして、親鸞は源頼朝の甥、すなわち親鸞の母方の祖父が源義朝だとすれば、疑問が解けることに気がついた。義朝は保元の乱で後白河天皇の命により父為義を殺している。

親鸞が頼朝の甥というのは仮説でしかないが、とりあえず謎は解けたと梅原猛は思う、

そんな梅原猛はもともと体が弱く、幼年時代は「この子は大人になれない」とさえいわれた。また青年時代は悩み多く、あえて暴飲暴食した。そのせいか、壮年になって、三度の癌を患った。

「そのような私が九十歳まで生きているのは奇蹟といってもよい。それゆえ、年とともに神仏の加護を信じるようになった」という。

悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し 親鸞